

豊郷地区長岡石の調査ノート

北條 園子 (うつのみやシティガイド協会)

1. はじめに

かつて「長岡石・戸祭石・山本石」が豊郷地区で採石された歴史がある。その採石は約50年以上前に途絶えた。長岡石に関わる研究資料や文献が少ない現状を、中川代表幹事の話で知り、採石の歴史に関わる情報収集とその研究の必要性から、長岡町在住の石渡重男（77歳）妻ノブ子（73歳）ご夫妻のご協力をいただき、聞き取り調査と現地調査を実施し、長岡石の文化を、今できる限り明らかにするもの。

2. 長岡百穴古墳（県指定文化財）

宇都宮環状道路北側の長岡街道に沿って、「長岡の百穴」とか「百穴」の名で市民に親しまれている「長岡の百穴古墳」は、宇都宮丘陵の南端に近い場所にある。砂質凝灰岩（長岡石）が露頭している斜面に、横穴墓が52基（東側44基、西側8基）掘りこまれ、南を向いて開口している。古墳時代後期7世紀前半につくられたと考えられている。日本遺産「大谷石文化」の構成文化財No 6に指定されている。

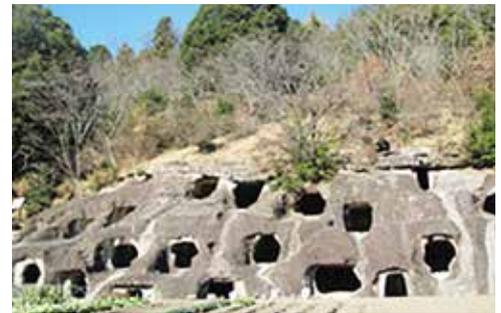


写真1. 長岡百穴古墳

また、周辺には多くの古墳が点在する。宇都宮丘陵南端の尾根近くには大塚古墳、帝京大学理工学部の南西部には瓦塚古墳群、北山霊園の南側に位置する、宇都宮丘陵の尾根上には北山古墳群がある。これらの古墳群は、6世紀前半から7世紀に築かれ、ほとんどの石室の側壁や天井などに砂質凝灰岩が使われていることが、報告されている。

「百目鬼」地名の由来には、逸話がある。

県庁の東側の塙田にある「百目鬼」(塙田2丁目に「百目鬼通り」がある)と呼んでいる地名の由来に、長岡の百穴が登場する。「宇都宮の民話」によると「平安時代の中頃、藤原秀郷に退治された鬼（3m余りの大きさだったらしい）が、長岡の百穴で身を潜めながら約400年の間傷ついた体を治療していたそうだ」。この逸話が成立した頃（時期は不明）には、既に長岡の百穴古墳の存在が知られていたものと推察され、たいへん興味深い。シティガイドをしている私のカンが働き、ここに紹介する。

3. 現地調査

- (1) 調査日：第1回 令和2年6月26日(金)、第2回 6月28日(日)、第3回 令和2年7月6日(月)
 (2) 調査人：池田 貞夫・中川 博夫・北條 園子
 協力者：文化課文化財保護グループ 星野 治彦、上河内民俗資料館 倉田 有子
 豊郷地区市民センター総括主査 阿久津恵子



写真2. 石渡宅での聞き取り調査



写真3. 石渡久次が生前使用した採石道具
令和2年8月20日上河内民俗資料館に寄贈

(3) 聞き取りした方：長岡町 ^{いしわたりしげ お}石渡重男・昭和18生、妻ノブ子・昭和22生、(亡父・^{きゅうじ}久次 明37生)、^{あきやまかずたか}秋山和孝、半田幸子

(4) 石渡宅に石渡久次が生前使用した採石道具（13点）が保管されていた。令和2（2020）年8月20日に、資料保存のため、宇都宮市文化課に連絡を取り、上河内民俗資料館に寄贈の仲介をした。
内訳：鶴橋6本、手ずる2本、トンカチ・大1本と小1本、徐倫（細工道具）1個、塵取り1個、石を起こす道具1本

(5) 石渡重男の記憶から

○ 父久次は、栃木県平和仏舎利塔制作に関わり外側の大谷石を積み上げたそう。また、作業員に刑務所に服役している人も投入されたという。

栃木県平和仏舎利塔は、昭和29年（1954）の建立開始の地鎮祭から10年後の昭和39年（1964）世界平和と人類の幸福を祈願するとともに、第二次世界大戦による戦没者の慰霊のために作られた。

現地での塔の状況は、基礎に大谷石が5段（目にみえる部分）積まれていた。道沿いの入口には、大谷石の尺角規格とは異なる大きなサイズ（巾約88cm、縦約64cm）の大谷石が3～5段積まれていた。久次が実際に積んだ大谷石が現在でも確認できる。

○ 仏舎利塔付近の戸祭山から採石された戸祭石は、火に強い特性を生かして、大谷の業者により『竈』に加工販売されたそう。

○ 昭和時代の長岡石の運搬は、東武運輸が担っていたそう。大谷石の輸送をしていた宇都宮石材軌道株式会社が昭和6年東武鉄道に合併されたことが、関連しているものと考えられる。

参考：明治30年宇都宮軌道運輸会社設立（大谷石の運搬を目的）⇒ 明治39年野州人車鉄道跡会社を買収し、社名を宇都宮石材軌道株式会社となる ⇒ 昭和6年東武宇都宮線開通 ⇒ 昭和6年東武鉄道に合併された。

○ 環状線と長岡街道の交差点北側で旧むぎくらの所（地元の通称・赤坂 ⇒ 関東ローム層の赤茶色を言換えたそう）、水が溜まっていた採石跡で、子供が溺れ父親が助けに入り、父子が亡くなった。（石渡が小学1年の頃、約70年前の悲しい事故）

(6) 隧道出入口

長岡街道沿い石渡宅少し東の道の北側に、高さ約2.5m巾約4.5mの隧道出入口を確認した。入口には安全のため柵がある。戦時中、採石場跡に地下軍需工場建設を進めていたようだ。石渡の話では、「武器を作る道具を備えたところで終戦になった。」そう。これは「うつのみやの空襲」の記述とほぼ一致する。

参考：日本製鋼所宇都宮製作所が地下工場（軍需工場・海軍航空機搭載用機銃の生産）を豊郷村長岡地区の石材採掘場跡に2,890坪を計画した。着工後2～3カ月で終戦を迎え未完成に終わった。「うつのみやの空襲」から



写真4. 隧道出入口



写真5. かまど五号

(7) 戸祭石のかまど五号

木村セツ子（89才）宅の西側軒下に「戸祭石のかまど五号」が保管されていた。

大きさ：かまど口2個各直径28cm、横80cm、奥行42cm、高さ50cm、台座高さ18cm、鉄製扉に五号の文字がある。譲って保管させていただけることで了解を得た。劣化が激しいので、移動する時には方法の検討が必要である。当時は戦後の生活改善で、飛ぶように売れたであろう。風化で角が崩れかかったかまど五号の、現在、もはや見ることのない実物を見た瞬間、私には宝物に見えた。

4. 長岡石の歴史

(1) 採石の起源

長岡石に関わる研究資料や文献が少なく、起源は不明。しかし周辺の数多くの古墳を造る際に使用され、切り石積の石室を造る技術などから、現在につながる、採石とのかかわりを考察していきたい。

(2) 採石の終焉

昭和35～40年頃まで掘っていたようだ。太平洋戦争の終戦後、戦災復興で建物の基礎材として、又『竈』の普及で、長岡石は大量の需要があり、採石は全盛期であった。昭和30年代に入り建築基準の見直しでコンクリートなどの進化、プロパンガス普及などの生活様式の変化により、長岡石の需要はなくなった。

(3) 長岡石の特徴

長岡石は、大谷石と比べると水にもろく風化しやすい、風雪にあたる野仏や狛犬などの彫刻には不向きで、反面、木目細かく美しい、軟らかで加工しやすい。火に強く、よく熱を遮断する特性から、石炉・かまど・曲突(くど)に加工された。石蔵・石塀・お稲荷さんなど、建築資材として土止めに利用されている。

長岡町付近一帯に広がる凝灰岩から採石された石材は、場所の名を冠し、長岡石、戸祭石、山本石と呼称された。(参考:「郷土誌豊郷のすがた・産業の発展」から)

5. 戸祭石の歴史

(1) 「戸祭産石之碑」

宇都宮中央警察署の西に、水をつかさどる神様とされる高麗神を主神神として祀る高麗神社がある。境内参道の右側に「戸祭産石之碑」が建立(明治26年3月)されている。

「宇都宮のいしぶみ」の解説によると、戸祭山には、昔から戸祭石といわれた白い石が採石されたが、しばらく絶えていた。天保年間(江戸時代末期)、坂本治平が開さくして盛んになったので、人々が開さく者「坂本治平」の業績をしのんで記念碑を建てたものと記される。先人の情熱と努力が伝わる。



写真6. 戸祭産石之碑

(2) 祥雲寺

祥雲寺は、昭和小学校の東に位置し、県を代表する枝垂れ桜で有名な歴史ある曹洞宗のお寺である。寺伝によれば、550年前の室町時代、戸祭備中守高定が開基し雪江良訓禅師が開山したという。山号は戸祭山で、所在する山の名を称しているが、一面の丘陵地帯を言うという。安藤住職に戸祭石の墓石への使用状況を案内していただいた。境内の墓地、天子塚という前方後円墳に沿って一列に並ぶ歴代住職の卵塔墓、近くの戸祭備中守高定公の墓は、共に戸祭石が使われていた。檀家の古い墓石にも多数戸祭石が確認できた。

このような状況から、戸祭石の歴史は人々の生活を支え共にあったことがうかがえる。

6. 石蔵の現地調査

(1) 秋山和孝宅

秋山和孝の祖父秋山要三郎(明治生)は、大正時代中期以降、長岡石を専門石工による本格的な垣根掘り(手掘り)により、採石場を経営したそうだ。山の地主から採石の承諾をもらい、採掘権を持っていた。石工石材組合は組織されず、個人経営だったそうだ。秋山要三郎は石渡久次の叔父にあたり、久次はその採石場で石工として働いていた。

和孝の記憶では、小学校入学する頃(昭和19年)は、採石していて、父義三は馬車で長岡石を運搬していた。生活に役立つかまどに、加工されていたようだ。百穴から西は、長岡石関係の人が住んでいた。

環状線を作る時、採石跡が1つ埋められた。

敷地の東側にある3棟の石蔵のうち、北側の蔵は大正時代に建てられた。長岡石の積み石で初めから瓦葺き、あまや(納屋)蔵として使っていたが、約30年位中に入っていないので床が抜けているかもしれない。中央

の蔵は、現在赤いトタン屋根だが、もともとは石屋根だった（徳次郎石が使用されていた可能性あり）。南側の蔵は、大谷石の張り石であった。

(2) 半田幸子宅

敷地内に3棟の石蔵があり、西側の蔵は大正初期に造られた長岡石の積み石2階建て、祖父の話では自分の山から採石した長岡石で建てたそう。太平洋戦争中空襲を避けるため外壁がコールタールで黒く塗られた、今でも痕跡が残る。この蔵は、戦争中に軍の薬品庫に使用されたそう。幸子さんが子供の頃、蔵の中に脱脂綿や包帯が残っていた記憶がある。



写真7. 長岡石蔵

東側に石蔵が2棟並んであり、北側は大谷石の積み石、南側は徳次郎石の張り石とともに2階建てであった。

西側竹林には、所有の山に散らばっていた山の神4社を一つにまとめた山の神が祀られていた。



写真8. 大谷石蔵 (左) と徳次郎石蔵 (右)

7. おわりに

私は豊郷地区の海道町で生まれ、豊郷中学校を卒業した。長岡の百穴は豊郷のランドマークで、小学生の頃友達と遊んだ記憶がある懐かしい場所だ。なぜ長岡石に関する資料が少ないのだろう。名称を大谷石として販売していたから、長岡石の名前が流通しなかったと推察する。過去の採石状況を知る方の高齢化が進み、早急な対応が求められる。今回の調査は長岡石の歴史研究のスタート地点に立ったばかりで、今後はシティガイドの視点を活用しながら、地元の歴史研究家の助言・協力をいただき、個人宅に残る古文書（契約書・古地図・帳簿など）の解読や地区内の石蔵の状況調査を、進行したい。そして、「長岡石の歴史と魅力」をたくさんの方に知っていただきたいと思う。

参考文献（本稿は、次の文献を参考にさせていただきました。）

「郷土誌豊郷のすがた」 豊郷地区郷土史編さん委員会 1999

「うつのみやの空襲」 宇都宮市教育委員会 2011 「うつのみやの民話」 宇都宮市教育委員会 1983

「うつのみやの歴史探訪」 埴静夫 著 2008 「宇都宮のいしぶみ」 宇都宮市教育委員会 1981